

寺口麻穂  
**ドギー  
 パラダイス!**  
 犬と人間の快適な生活  
 第18回  
**ピットブル④**

在米22年。かつては人間の専門家を目指し文化人類学を専攻。2001年からキャリアを変え、子供の頃からの夢であった「犬の専門家」に転身。地元のアニマル・シェルターでアダプション・カウンセリングやトレーニングに関わり、個人ではDoggie Project (www.doggieproject.com) というビジネスを設立。犬のトレーニングや問題行動解決サービスを提供しつつ、13歳になるピットブル、ジュリエットとニュージャーニーで楽しく生活中。ご意見・ご感想は：info@doggieproject.com



てらぐちまほ

されて「処罰」に至る確率は高くありませんが、人間側の考えが変われば、同じような制裁を受けるようにならないとは言えません。

### 偏見でももった目が 見逃す「宝」

シェルターに犬をアダプトにくる人の大半は見かけて犬を選びます。見た目が可愛い、かつこいからが選択の大きな理由。それ以外によくあるのが、「ピットブル以外ならどんな犬でもいい」とか、「こちらが薦めた犬を見て「これピットブルですよ。うーん…」とこの犬種を避けるケース。残った他の犬種から無理矢理選んだ犬は、こちらが薦めたスーパードライジーなピットブルの百倍手がかかる犬だったりします。誰もがピットブルの飼い主に向いているというわけではありませんし、「どうしても」と言う人には無理矢理薦めません。が、偏見が邪魔をしてその犬の本質を見ようとしなない人は、フィルターで目を覆って「宝」を見逃しているのではないのでしょうか。これは何もピットブルに限ったことではありませんね。偏見という淋しい心理は真実を覆い隠し、人間を悲しい方向に進ませることがあります。

最近、動物愛護団体SPCA (Society for the Prevention of Cruelty to Animals) LA支部の今年のヒーロー犬大賞が発表され、見事大賞に輝いたのは、身体を張ってアパートの火事から飼い主の少女を助けたピットブルでした。表彰式に出席したダイアモンドは、火事から半年経った今でも痛々しい傷跡だらけ。でも、もらった盾を横に誇らしげでした。しかし皮肉なのは、少女が自分の命を救ってくれた愛犬と一緒に住めなくなりました。家を失った少女一家は新居を探しましたが、ピットブルだからという理由でダイアモンドの入居を許可するところがないのです。

問題が出されました。「あの犬種は人間に危害を加えることが多いのだし……。ペットには向いてないので当然かも」と思われたでしょう。ピットブルを飼っている生徒もいて抗議したようですが、先生からも学校からもあつげなく却下されました。「論点を信じようが信じまいが構わない。理由をあげて結論つける練習のだから」と。考えなくてはいけないのは、「ピットブル」というレッテルつけてきた犬をひとくりにし、すべて問題があると決め付ける「偏見」です。では、偏見を持つ人のどれだけがピットブルのことを知っているのでしょうか？ ほとんどがメディアや周りから得た情報を鵜呑みにしているのではないのでしょうか？ そうした情報に基づいた偏見が、ピットブルに悲劇をもたらすのです。

家庭のペットに向かないピットブルが存在することも確かです。でも、家庭のペットに向かないジャーマン・シェパードもゴールデン・リトリバーもチワワもこの世には存在します。ピットブルのようにひとくりに

11年前に愛犬ジュリエットをアダプトするまでこの犬種に関しては無知でした。シェルターで紹介された犬がたまたまピットブルで10年以上も一緒に暮らすことになり、「愛娘」への愛情がピットブルへの偏見撲滅運動を始めるきっかけとなったわけです。でも、その出会いも「ただの偶然」ではなく「必然」だったのでしょうか。私は愛するピットブルへの偏見撲滅運動をするこ



筆者が目ぼれしたピットブル、ミスター・ハッピー。虐待されてシェルターにやってきたにもかかわらず、いつもご機嫌だったので命名。

分と闘っていきたくて思っています。それは自分自身も含めてです。次号は、「ピットブル」の最終回。ピットブルの虜になっているセレブたちを紹介しながらピットブルの魅力をお話します。お楽しみに。